学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	森 彩乃 人間発達科学専攻2015年度生		論文題目	中高生の解離と不適応の関連―縦断的検討―
審査委員	主　　査:	菅原 ますみ　教 授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 ： 否
	副　　査:	大森 美香　教 授		「否」の場合の理由
	副　　査:	上原 泉　准教授		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	冨士原 紀絵　准教授		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	今泉 修　助 教		■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博 士	(学術)		■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Psychology)			□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学 位 論 文 審 査 ・ 内 容 の 要 旨

本論文では，中高生の解離傾向の実態及び縦断的変化を明らかにし，学校不適応や多側面的な問題行動傾向（注意欠如の問題、情緒の問題、行為の問題、友人適応上の問題、向社会性低下の問題）に解離傾向がどのような影響を及ぼすかを首都圏2校の高校生を対象とした追跡調査によって検討がおこなわれた。研究1(N = 540) では，1年間に3回の縦断調査データをもとに、中学1年生から高校3年生までの6学年での解離得点の変化についての潜在成長分析を行い、学年とともに解離得点が低下する傾向があること、また解離得点には個人差があり1年間での安定傾向が認められることを明らかにした。研究2 (N = 733) では、2波のパネル調査をもとに、解離得点の高さが学校不適応（学業成績の自己評価と学校での孤立感）の高さを予測することを明らかにし、研究3 (N = 1,773) では、解離得点が日常生活上の多側面の不適応（問題行動傾向の高さ及び向社会性の低さ）を予測することを明らかにした。研究4 (N = 438) では、解離得点から学校不適応を部分的に媒介して日常生活上の多側面にわたる不適応に至るという総合的な仮説モデルについて、2年間にわたる追跡調査のデータをもとに共分散構造分析によって検討を行い、仮説を支持する結果を得ている。

審査委員会では、日本での一般人口中の中高生の解離傾向と適応状況との関連に焦点があてられた研究は未だ希少であり、限定的なデータではあるもののその資料価値が高いこと、また早期に安定して高い得点を示す生徒を発見しその適応状況（学業成績や孤立、問題行動傾向等）に着目することによって中高生のメンタルヘルスの向上に貢献できる可能性を示唆するエビデンスを提示した点で意義ある研究であると評価された。一方、1回目の審査会では、解離概念に関する記述が不足していること、解離研究に関する最近の動向を概観する必要があること、解離傾向を起点として不適応に至る経路の理論的な考察が不足していること、学校教育現場に対する示唆の内容を吟味する必要があることなどが指摘された。審査の過程で指摘された疑問点やコメントをもとに作成された修正論文とそれにもとづくプレゼンテーションについて2回目の審査がおこなわれたが、適切な修正がなされたと判断され、公開発表会が開催された。公開発表会では、質疑に対して適切な応答がなされ、当該分野に対する十分な学術的見識を有していることが確認された。

以上より、本審査委員会では全会一致でお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科の博士（学術）、Ph. D. in Psychologyの学位を授与するのに値するものと判断し、合格とした。